

大学を去ってから

伊藤 洋

2004年4月末日をもって早稲田大学を定年退職した。その時から早くも3か月が過ぎた。研究室の書籍類はかなり処分したが、それでも必要と思える残りのものは家に引き上げた。その文献、資料の整理、生活の立て直しなど、まだ終わっていない。

もともとのんびり屋で、仕事も生活もスローモードで、なかなか片付けられない方だから仕方がないのかもしれない。しかし残り時間がどのくらいあるのか、いや、まだあるのかどうかさえもわからないのだから、そろそろ生活の仕方を変えなければならないと思っている。

今は、大学院演劇科の博士課程の学生数人がゼミで読みかけていたフランス戯曲（Rotrou, “Le Véritable Saint-Genest”）を読み続けたいとの要望で、週に一回定期的に大学の自習室を借りて読書会を開いているし、演劇博物館の館長時代にお膳立てした講演会などにも顔を出しているのだから、大学にはたびたび出ている。

『エイコス—17世紀フランス演劇研究—』について思い起こすと、すでにこの研究会が発足してから33年ほどになる。私がフランス留学・博士論文審査を終えて急遽帰国したのは、68年の「5月革命」後1年ほどたった1969年5月末で、すぐにその年度の代講をお願いしていた方々に代わって、フランス語・初中級の授業を始めた（その数年前に私は教育学部の専任講師に任命されていた）からとにかく慌しかった。

一息ついたその年度末ころから、仏文科の岩瀬研究室の学生の方々との交流が始まり、『エイコス』第1号に岩瀬先生がお書きになっているように、70年か71年から「17世紀フランス古典劇研究会」の読書会を私の研究室で開始することになった。私自身も一人でフランスの図書館にこもって読んできた戯曲の再読解をするつもりで始めたのだった。当時の学生諸君と共通するところは、戯曲を単なる文学作品としてのみ読むのではなく、常に上演されるものとして、上演の舞台を意識しながら読んでいこうということだった。

最初に読んだのが何の戯曲だったか定かではなくなったが、Tristan L’Hermite, “La Marianne”やMairet, “La Sophonisbe”などを読み進めた記憶がある。その時の中心的メンバー（皆吉郷平、橋本能、野池（当時池田）恵子諸氏など）が今日でも研究会の中核になっており、よくも続いたものと感心している。

その後必ずしも単なる読書会ではなく会員相互の研究発表も交えるようになり、その研究成果をまとめておこうということになった。最初は小林卓氏が主になって尽力し、『エイコス—17世紀フランス演劇研究—』第1号が刊行された。1977年11月のことだった。以後、夏休みや入試時期を除いて定期的に月に一度集まって研究発表や読書会をし、『エイコス』刊行はやや不定期ながら、延々

と16号まで続けてきたのである。

共同研究で科学研究費補助金を得ては、フランスの国立図書館から17世紀（主として世紀前半）に刊行され、その後は顧みられないマイナーな喜劇、悲喜劇、悲劇などのマイクロフィルムを取り寄せて読み合ったりしたこともあった。

その後、白石嘉治氏、萩原芳子氏らが加わり、早大以外の研究者が多くなったが、さらに他大学の大学院博士課程在学学生など若い人たちが参加し活発になっていった。ここ数年前から、文学部のオディール・デュシュッドゥ氏も研究会に参加して下さるようになり、研究テーマが多彩になった。

一方、長崎に住んでいるため日常的には研究会に出席できない戸口民也氏の尽力で、既刊の『エイコス』の論文全部がデジタル化され、今ではウェブ上で読むことができるようになってきている。

以上、ここまで研究会が途切れず、『エイコス』刊行を続けてきたのは、ひとえに会員諸氏の努力、研鑽の賜物であり、会員相互の協力の成果だったと言えよう。もはや私などの出番ではなくなってきている。実際、近年私は演劇博物館館長の仕事で多忙だったこともあり、またそれを口実に欠席することも多くなり、会員諸氏には大変に迷惑をかけてしまった。

そんな折に私は定年退職を迎えたのである。頃合もよいと言うべきかもしれない。今後当分は、デュシュッドゥ先生のご好意で早大文学部の先生の研究室で「17世紀フランス演劇研究会」を続けられることになったから、これからは私は一会員としてできるだけ出席し、若い人たちの意見を聞きながら、なおし残した仕事を続けていこうと思っている。

例えば、中断してしまっていた宮廷バレエの継続的なより深い研究、その中で使われていた魔術の問題と時代風潮の関係、そしてそれらが演劇の世界に与えた影響も研究の余地がある。また以前から気になっていたが手がつけられなかったドイツ・バロック演劇の問題だが、最近フランスで一冊の大部の本〔Florent Gabaude, “Les Comédies d’Andreas Gryphius et la notion de grotesque”, Peter Lang, 2004〕が出版された（多分テーズだろう）ので一気に私の研究課題にもなった。17世紀前半のドイツ劇作家アンドレアス・グリューフィウスの演劇である。もちろん私が今からドイツ語を学びなおすわけにもいかないが、この作家の作品と同時代のコルネイユの作品を比較して考察する必要はあると思う。これからの若い人に研究を期待しよう。

さらに日本の現代演劇上演状況を見ると、翻訳劇があまりにも英米演劇に偏りすぎているように感じる。これは私だけの偏見ではないだろう。フランスの芝居でも、英米圏で英訳上演されて当たったものを取り上げたり、英訳から翻訳（いわば重訳—今の時代に！—）されて上演されたりしている。これにはフランス演劇研究者の怠慢もあろうし、力不足もあるのだろう。私自身もフランスの現代戯曲で紹介したいものはいくつか持っている。こういう仕事もこれから少しはこなせるだろう。

私としてはこれからどれだけの仕事ができるかわからないが、できるところまでをして後進に後を託すことにしよう。この「17世紀フランス演劇研究会」が少しでもその後進の人たちの道しるべになればこれにすぐる喜びはない。

2004年酷暑